

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 4

2009.09.12 (聞き手 高橋素子)

高橋 「温故知新」・・・と言うことで始めて頂きました「紅緑の滑稽俳句集」の読み解きもいよいよ今回で四回目という事になります。今回もまた前回同様に、108年前の滑稽句の世界に楽しくお導きくださいね。

会長 すべての句について読み解くのが理想的ですが、この分では数年を要することになりますので、句数を制限して滑稽句として特長あるものを中心にすすめてみましょうか？

高橋 やはり大変！膨大な句の数ですものね。（笑い）

それでは、今日は本題の四ページ「春の時令（年中行事）」から始めさせていただきますね。

季語は「元日」一茶の句ですね。

☆ 元日も立のまんまの屑家かな 一茶

「屑屋」でなく「屑家」ですから一茶が自らの家を謙遜しての句ですね。

会長 「立ちのまんま」は「立ったまま」ということですね。立ったままの屑家・・・障子や襖を張りかえることもなく、磨くほどの柱も無くと言うわけです。これが人間でしたら「着の身着のまま」ということになります。

高橋 次の季語は「立春」一茶の句が続きますが、どんどん進ませていただきますね。何しろ膨大な句の数ですから・・・（笑い）

☆あばら家の其身其まま明の春 一茶

☆あら玉の年立かへる虱かな 一茶

☆春立や彌九郎改め一茶坊 一茶

☆うす壁やどちの穴から春がくる 一茶

大体読んだ通りですよ。一茶の幼名は弥太郎と書いてある書もありますね。

会長 あばら家の其身・・・これが先ほど申しました着の身着のままですね。

☆あら玉の年立かへる虱かな 一茶

年末に正月用の着物を仕立て直したのです。とりついていた虱もきれいに洗い落とした筈が年あらたまると、着物にもどってきた。ということです。虱は今は滅多にみられませんが当時は身近なものでしたね。

高橋 続けて他の人の「立春」の句も書いてありますね。

☆春立つといふばかり二や三毛猫の 大江丸

☆布団から頭を出せば春が来た 紅緑

大江丸の三毛猫の句、面白そうですがご説明頂けますか？

会長 ☆春立つといふばかりニや・・・

これは猫の鳴き声をうまく取り込んでいます。

「ニや」は「ニャー」です。

「二」と「三」も・・・ちょっとお洒落な句ですね。

高橋 成る程。そうですね。

次の季語は、「春寒」ですよ。

☆年寄りの腹立つ春の寒さ哉 也有

☆春寒や叩きそこねし鉦の臍 紅緑

寒い冬を我慢して春に期待して居ただけに、年寄りには余計に春の寒さは我慢出来ないと言う事ですね。紅緑の句も寒さに手が悴んで鉦を叩きそこねたとか・・・（笑い）

会長 ☆年寄りの腹立つ春の寒さ哉 也有

暖かいはずの春が寒い。それが許せない。私も「いい年」ですから良くわかります。

☆春寒や叩きそこねし鉦の臍 紅緑

鉦・・念仏の鉦でしょうか。凹凸の凸を臍と見た
のでしょうか。

高橋 いえいえ・・春寒を涼しいと詠まれたり、春寒に
薄着をされたり、会長はまだまだお若いですよ。
(笑い)
(後に記載。会長の俳句参照) 続けますね。
次の季語は「春宵」です。

☆ 公達に狐化けたり宵の春 蕪村

☆ 酔ふた人の謡ふ後架や春の宵 波静

☆ 春の宵酒盗人の躰かな 波静

☆ 狐釣を狐のだます宵の春 春二

蕪村もこんな句詠んだのですね。
三句目・・広辞苑に「後架」は禅寺で僧堂の後ろ
にかけ渡して設けた洗面所とありますから、禅僧
がトイレの中で酔って春の宵にのんびり謡ってる
のでしょうか？

会長 一句目は、公達の正体は「狐」だと断定していま
す。それほど心地よい価千金の春宵を褒めてい
るのでしょうか。後架の句・・トイレですかやはり
気分がいいですね春宵は・・・。

酒盗人の躰・・自身のことかも知れません。
狐釣りは「罨」ですね。罨にかかったふりをして
見せたのでしょうか。

高橋 次の「春時令」の季語は「春夜」ですよ。

☆春の夜の撲られ損や人違ひ 笠雨

☆酔さめてひたあやまりや夜半の春 笠雨

二句目は、一句目の続きの句ですね。情景を思い浮かべると笑えてきますね。（笑い）

会長 一句めの主体は作者自身で二句めは相手を読んでいますね。宵から夜半へ二句で時間の経過を描いていますね。もうちょっと可笑しいのが出てくるといいんですが。

高橋 どんどん行きますね。
次は「長閑(のどか)」です。春四月の季語と教えて頂きましたね。

☆長閑さに無沙汰の神社廻りけり 太祇

☆米あれば長閑き庵の一日哉 鳴雪

☆長閑さやどの穴見ても蟹は留守 半狂

☆長閑さや牛の角文字よだれ文字 てつ

「牛の角文字」「よだれ文字」って・・・
どんな文字ですか？それが長閑さと関係が・・・？

会長 牛の角文字は「い」ですね。よだれ文字なんですか。わかりません。長閑の句の中では蟹穴がよろしいですね。
作者自身も蟹穴のような家を脱出しているのですから。

高橋 次の季語は・・・「日永」ですね。一茶の句ですね。

☆念佛の申賃とる日永かな 一茶

☆日が永い永いとのらりくらり哉 一茶

会長 申賃・・・念仏を唱える門付けですね。
念仏で料金を取るのか・・・という異議が若干。のらりくらり・・・結局何もできず仕舞になる可笑しさにつながります。

高橋 「日永」の句まだまだ続きますよ。

☆普請場に辨當取られて日永哉 笠雨

☆永き日を土舟つくる狸かな 口寸

☆永き日や狸のふくり象の鼻 紫人

☆ 凧つくる夢想兵衛や日の永き 耕村

かちかち山の童話や童謡から詠まれていて楽しい句ですね。（笑い）

会長 現実の出来事の中に滑稽を見つける仕方と故事や昔話に題材を求める。ふたつの方法をとっていたということがわかりますね。

高橋 成る程そうですね。次は、紅緑自身の句が並んでますよ。

☆瓢箪から駒の出でたる日永かな 紅緑

☆永き日を欠伸して居る石の獅子 紅緑

☆猫の眼になかなか永き日なりけり 紅緑

一句目、春の永い一日の間に「瓢箪から駒が出る」思わぬ事が何か実現したのでしょうか？

会長 というよりも・・・瓢箪から駒の・・・駒は「馬」のこと。

実現不可能なことを言ったのが実現してしまうことを言います。瓢箪から馬が出るはずはないのに・・・。ところがこの句は「将棋の駒」が出たとして本来の意味をうらざりからかっているのです。

二句目は私の句に似たのがあります。

★狛犬の欠伸とまらず神の留守

類似句になりますか・・・。

猫の目の句・・・これは擬人化に近い。猫は瞼を開けたりとじたりします。それが時間経過を強調する。

日永にびたりです。

高橋 成る程。解説して戴くと面白さがよくわかりますね。

次の季語は「遅日」ですが、一般には「日永」と

同じ季語の項に属してますね。

☆遅き日や鼠顔出す壁の穴 紅緑

会長 これは鼠も退屈しているだろうという「思い込み」を句にしています。

高橋 次の季語は「春日」ですが、これにも「猿蟹合戦」が引用されてますよ。

☆小座頭の睨み合ひたる春日かな

☆蟹公が柿に水やる春日哉

会長 小座頭は見習いの座頭ですね。座頭は盲目の公認官位といいますか按摩や高利貸の職が認められていたわけですね。
サルカニ合戦のカニですね。これはなにが面白いのか不明ですね。

高橋 カニが自分で取れない実の為にせつせと水をやって育てている・・・猿蟹合戦をイメージすると面白いかも・・・ですよ？
まだ、春の時令が今少し続いていますよ。
次の季語は「水温む」で鬼骨の句ですね。

☆蟹の目や鱈の髯や水温む 鬼骨

会長 切れ字の「や」がふたつありますがそれほど強く切れていませんね。
蟹の目に鱈の髯に水温む・・・としてもよろしいほどの切れです。

並列にしたことで風景のひろがりが出ています。

高橋 成る程！「や」や「に」を並列にすると、風景の広がりが出て来るのですね。次の季語は「行春」、一茶の句からですよ。

☆やよしらみ這へ這へ春の行方へ 一茶

☆春が行く行くとぬかせど誰も来ぬ 虚子

☆惜まる、春ぢやものとして行くぢやもの 紅緑

会長 「やよ」は「やあ」という呼びかけですね。風呼びかけている可笑しさですね。二句めは季語「行く春」に言いがかりをつける可笑しさですね。紅緑の句は・・・季語「春惜しむ」の理由を可笑しく説明しています。

高橋 続けて紅緑の句が続いてますよ。

☆軽石は薬にならず暮る、春 紅緑

☆行春をいやぢやいやぢやと柳かな 紅緑

☆此春を下手の発句に惜しまずや 紅緑

会長 薬石というぐらいですから鉱物を薬にしたんでしょうね。しかし、軽石は薬にはなりそうもない。とりあわせの句です。暮るゝ春というのは「暮の春」のことですね。軽石を手にして、これは薬にはなるまい。と呟いて

いる。

春の暮はそれほどゆとりある時期なのでしょう。柳の句は「春惜しむ」は柳も同様である。柳もいやがっているよ・・・と。

「下手の発句」の句は・・・俳句に夢中になって春の時間を消費しても後悔しませんよとっています。春を賛美するに「下手な発句」として謙遜していますが、実は自信たっぷりが見える句です。そこが可笑しい。

高橋 次は春の時令の最後の季語「春雑」ですね。

☆ **此春は御多福なんと娶らんか** 岐山

御多福なんて？・・・今、こんな事女性に言ったら誰もお嫁に来てくれませんよね。

会長 お多福は 醜女のことですが 対極に美人があります。本心は美人を娶りたい。しかし、それを言うほどの資格は自分にはない。
そして娶ったあとは美女などと自慢しない日本人の伝統的会話術です。。謙譲語に愚妻・などと言う言葉がありますから。

高橋 一面美徳の様で、素直に言えない複雑な伝統的日本人の話術ですね。最近の人には余り流行りませんが・・・（笑い）

それでは、今回も同じ季語の会長の俳句をご披露して、現代俳句と108年前の滑稽句との比較をさせて戴きますね。

★ **俳句があればなんにもいらぬお正月** 健

★元旦に剃られ去年の不精髭 健

★立春や寝ていた春の起きあがる 健

★春寒を涼しいと言ひ天邪鬼 健

★ことに春寒伊達の薄着には 健

★春宵(しゅんしょう)の千金浪費してをりぬ 健

★境曖昧春宵と春の夜 健

★長閑(のどか)てふ季語や怠惰のひそみゐる 健

★長閑なりあけてはとぢる鯉の口 健

★閑居して悪事企む日永かな 健

★遅日なり柱時計の怠けきり 健

★濡れ縁に怠け人ゐる春日かな 健

★水温む鯉の口より吐き出され 健

★行春や押されて動く大き船 健

今、見て来たところでは、108年前の時令の滑稽句は考えたまま見たままをそのまま詠んだものが多い様ですね・・

会長の句は機智的でやはり面白いですね。もっとも一番目の句は信じられませんが・・(笑い)

会長 108年前の句と私の句の違いはまだ明確には言えませんがかなり共通した可笑しさがあるようです。

私は自身の滑稽句を手法の違いで分類していますか。紅緑編の句集を手法の違いで分類するのもよろしいかと思
います。

高橋 有難うございました。
今回も楽しくいろいろ学習出来ました。次回も期待（いえプレッシャーですか・・・）しています。
よろしくお願い致します。

会長 温故知新。
紅緑編の滑稽俳句集を読んでそこから抜けて新しい滑稽
を模索したいですね。
などと尤もらしいことを言うのが、ホントの滑稽。

(2009年9月号)